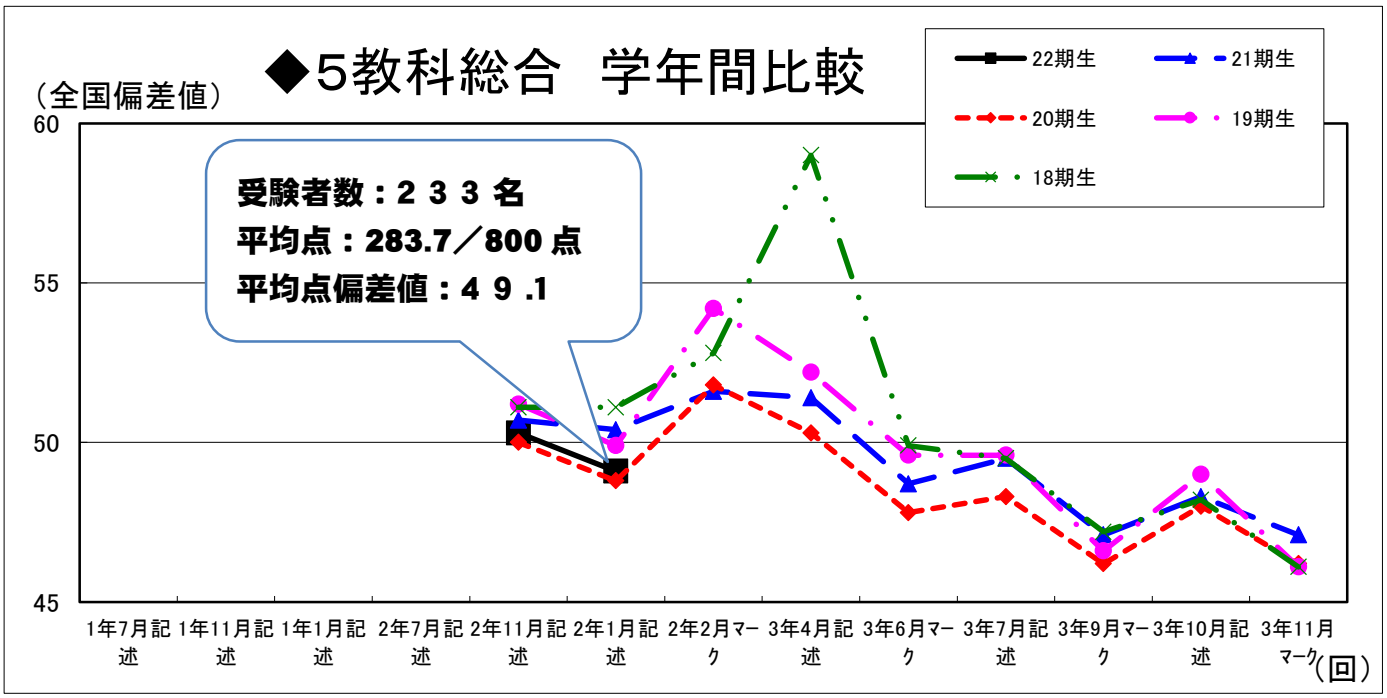
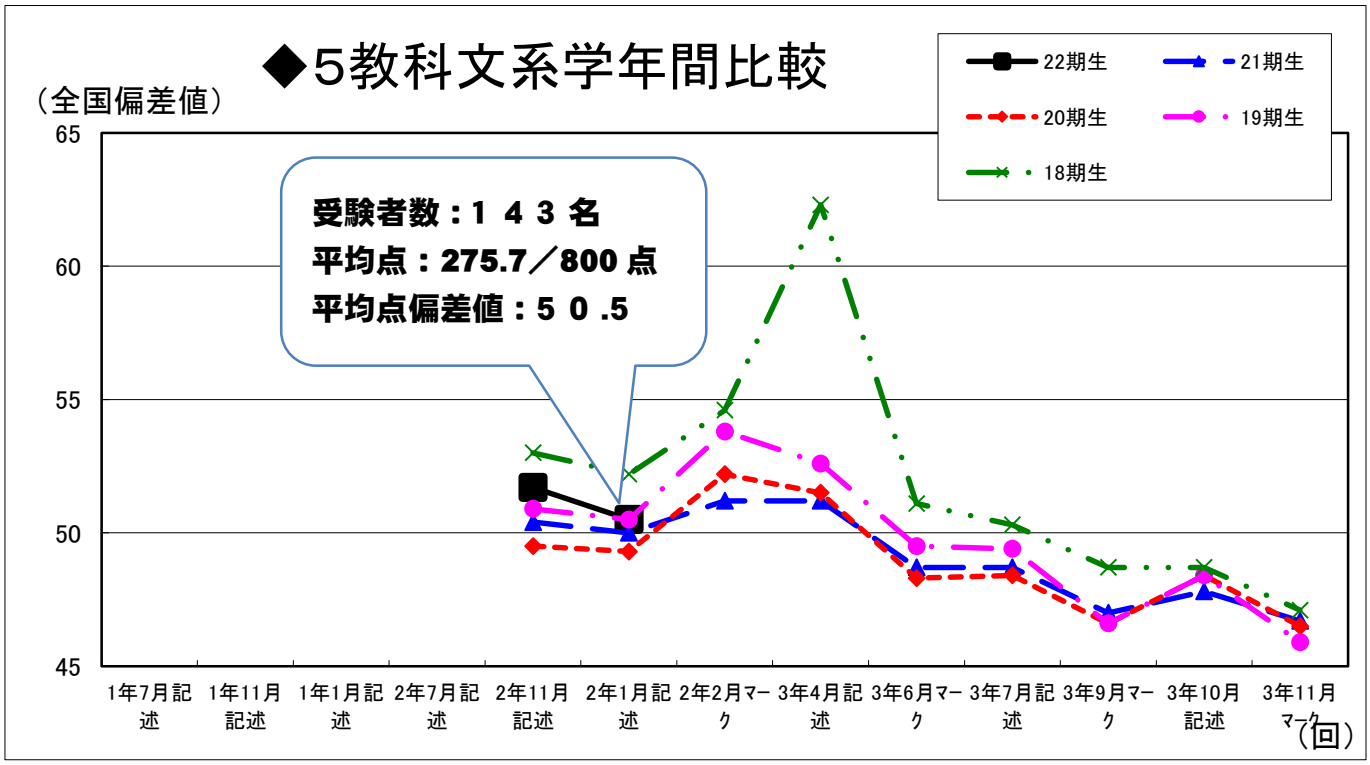
# 雄　飛

向陽高校進路便り　第 101 号
平成 29 年 2 月 28 日(火)
～臥龍鳳雛～

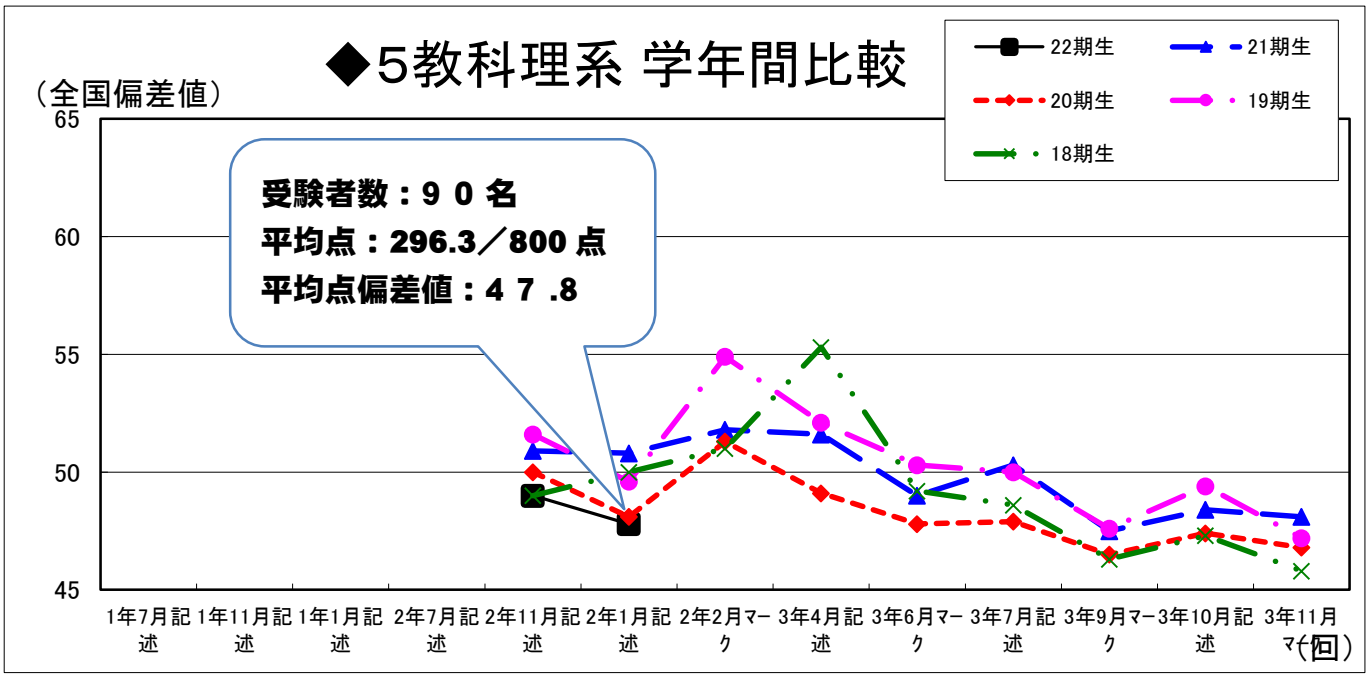
２２期生センター試験まで
320

## 【2 年生】模試分析　Benesse1 月記述模試




記述模試の記述問題から逃げていないか！？
常日頃から、「文章で表現する」ことを意識しているか！？
単語だけでコミュニケーションを取り「楽」していないか！？




## ２年生へ　特別連載コラム②

なぜ小説を「学ぶ」必要があるのか？
羅生門、山月記、こころ、そして

福田　園子

１．山月記

さて、２学年に進級した初夏、諸兄は中島敦の『山月記』を読んだ。これは、秀才の誉れ高い李徴が職を辞し詩作を以て大成しようとするが、ついに人食い虎となり親友に別れを告げるまでの一夜を描いた小説だ。これを、テストに出そうだからと、「尊大な羞恥心」「えーと、あと自尊心？」というキーワードで丸覚えしただけで、物語の深みへ降りて行けなかった御仁が散見されたのが気にかかっている。

「自尊心」とは何か。諸兄にわかりやすい言葉で言えば「プライド」である。誰でも持ってるし、全く無いと逆にまずい。「李徴は自尊心高すぎープライド捨てればいいのに」と笑うことは楽だが、一方で「あ…でもこういうとこ、俺もあるな」と気づけた者がどれだけ居たか。我こそはと向陽高校へ進学してきてみじめに挫折をし、それでも模試の結果の上下に一喜一憂してしまい、それでも捨てられないのがプライドである。ならば李徴が虎になろうが熊になろうが捨てられなかった自尊心を責めてもしょうが無い。

李徴に足りなかったのは「ひと」ではなかったか。

わたしたちはいかにして幸せになれるのか。「自分だけ」で幸せになることは不可能だし、「自分だけ」の判断は誤る可能性が高い。ひとが幸せになるためには他者と心を通わせ、想いを伝え合うことが必要である。時にそれは非言語のアートや音楽や舞踊である場合もある。しかし、ほとんどの場合は言語を介す。ひとの想いを汲み取れないのは、双方にとって不幸である。その想いを表現し、胃の腑まで落とし込む。誰かに想いを伝えるたびにひとは成長する。成長はひとを豊かにする。ひとにはひとが必要なのだ。虎になるまで李徴に欠けていたものは、「ひと」を理解し、「ひと」を幸せにし、「ひと」への感謝を持つこと、だったかもしれない。

２．こころ

多くの学生が初めて読む夏目漱石、「こころ」。Ｋと「私」、そしてお嬢さんとの三角関係はどうなるのか？ 先の読めない展開にやきもきし、Ｋの自殺という結末で（教科書では）終了したが、読後は苦いものだっただろう。多くの生徒が「なぜＫが自殺したのか？」「なぜ土曜日だったのか？」と議論し合ったことと思う。

ここで一つ、新たな視点を入れてみる。『選択』である。我々は日々、何かを選択している。５時に起きるか、それとも６時でいいか。お菓子をあともう一つ食べるか、我慢するのか。この友達に声をかけるか、面倒だからよすか。『選択』すれば必ず『選択しなかった方』が消えていく。我々はその消えてしまった『選択しなかった方』の重みを、時に思い返しながら、しかしほとんどは忘れ去っていく。現実社会には熟考できる時間は、そんなにたっぷりはない。しかしそこには「責任」がうまれてくる。起床時間などの些末なことですら、毎日積み重ねてしまえばその時間の重みは日増しに増え、その責任を負わねばならない。

「私」はそんな『選択』を無自覚に重ねていったが、結末を知っている我々は読み返すたびに「なぜそこで謝らない？」「あそこで目を覚ましていれば‥？」とやきもきする。そうなのだ。お嬢さんのことで頭がいっぱいだったために自己中心的な『選択』を重ね、結果一生を縛られることになるＫの自殺に至る「私」は、我々に『選択』の恐ろしさを教えてくれる。でもそもそも「自己中心的じゃない選択」なんて、あり得るのだろうか？ よりよい『選択』をするにはどう生きるべきか、「こころ」はさまざまな視座を与えてくれる。